

ある喪失

月が、肌を透かすかのように細い光を投じている。

十一月初旬。空気が澄み渡り、深く息を吸い込むと肺がびりびりするような寒さに覆われている。

新学期から二ヶ月、新人生も新しい生活に馴染み、ハロウィンでピークを迎えた寮生達のお祭り気分も今は落ち着きを取り戻していた。

ここ数日の冷え込みも手伝つて、消灯まであと一時間というこの時刻に庭を渡る人影はない。

しかし、その庭の向こう、なだらかに続く芝の丘陵の中腹に、一人の少年が立っていた。

ウールのコートを羽織り、喉にしつかりとマフラーを巻き付けたその少年は、月に向かって白い息と共に唇を動かしていた。

遠くからは、ただ独言を呟くようにしか見えないその後姿に、もし近づく人影があったなら、その冷たい空気を支配する微かな響きに耳を疑ったことだろう。

少年は、恐ろるべきピアニッシモで、天上の調べを口ずさんでいた。

一

「…ア…ミュー！ …アミュー！」

カミュ・ルーファス・パロウは、突如聞こえてきた唖れ声にふと足を止めた。時刻は八時半。スミス寮は消灯をひかえ自室に向かう寮生たちの賑やかな足音で溢れている。カミュもまた、談話室から彼の自室に向かう途中だったのだが、階段を上りきったところで、誰かが自分の名前を呼んだように思ったのだ。

「…カミュ！」

再度、今度は多少まともな発音が背後から聞こえ、カミュは慌てて後ろを振り返った。同じオーケストラに属するファゴットのウォルトが分厚いウールのガウンを羽織り、喉をひゅうひゅう言わせながら、今カミュが上つて来た階段を駆け上がってくるどころだった。

「ウォルト？ 大丈夫なのか？ そんな格好で——」

慌てて駆け寄ると、ウォルトは背中を丸めて喉を押さえている。

「まだ寝ていなくちゃ駄目だろう？ 酷い声だ」

カミュはウォルトの肩を叩き、今彼が上つてきた階段の方向にウォルトの体をねじ向けた。

カミュの隣部屋のウォルトは、ここ数日風邪をひいて自室を離れ、一階の医務室で過ごしている。扁桃腺持ちで熱が高かったため、学校医が別室で安静を命じたからだ。

今日も授業には出ていなかった。寝間着の上にガウン一枚で出歩く体調ではないだろう。カミュはそのままウォルトを階段の方へ押し出した。

「いや、それがさ……」

元来た道を辿らせようとするカミュの力に抗い、ウォルトが慌てて続けた。

「実はもう熱もないし、体は昨日からなんともないんだよ。ただあまり声が酷いんで、まだ治つてないのかと思つて今日一日様子を見たんだ。だが、どうもこの声は、風邪のせいじゃないらしい。……ついに来た、つてところかな」

「ごほん、と無理に咳払いして、少年は少々大人びた苦笑いをした。

「いや、話には聞いていたけど、本当に参るよ、これは……。声帯が無くなつちまつたんじゃないかと思つて、声がなくなつてね」

カミュは、全身を走つた衝撃を密かに押し殺した。一瞬、全ての音が周囲から遠ざかつたように感じた。

変声期。

十四歳前後の少年ならば、遅かれ早かれ通過する成長の一

過程だ。

「今は無理しない方がいいよ。今無理すると、変な癖がついて、変声後にも声がひっくり返ることがあるらしいから」

カミュは微笑い、また無理に咳払いをしようとしたウォルトの背中を撫でて、その咳を封じた。

第四学年に上がった彼らのクラスには、既に変声が始まっている少年の数も決して少なくない。隣部屋のアイオリアやハウなどはこの学校に入学して来る前、ブレップ・スクールで既に変声を終えていて、カミュは彼らの子供時代の声を知らなかった。

だが、ウォルトの声はこれまで落ちていたアルトで、比較的カミュの声質や声域にも似ていた。成長の証であり、喜ばしいことだが、無惨に喰らってしまったその声を実際に聞いてしまうと、いたたまれなさを感じる。それは、既に変声を迎える覚悟が出来ていると思ひ込んでいたカミュにとつて、予想外の衝撃だった。

次にウォルトが出す声は、少なくとも一オクターヴは下がっているだろう。

再び聞こえた自分の声が、今までより途方もなく低いことを実感した時、彼は少し大人になった自分を誇らしく思うのだろうか……。

「それで、明日の寮会議君に代役を頼めないかと思つてさ。シャ

ワリーの使用時間延長の件、うちの学年からの要望つてことで発言して来て欲しいんだ。この声じゃ、まともに喋れないから……」

不意に、周囲の雑音と共にウォルトのひつくり返つた声が聴覚を打つて、カミュは我に返つた。ウォルトはスミス寮の学年代表を勤めている。わざわざ自室に戻つて来たのは、この用事を誰かに託したかつたからに違いない。

「ああ、勿論構わないよ。他にも、もし代わりに来ることがあつたら言つてくれ。本当に、今は出来るだけ喋れない方がいいんだ。丁度、と言つたらおかしいけれど、病み上がりなのは本当だし、もう二、三日医務室に居たらいいと思ふ。」

カミュは、無理矢理頭を切り替え、責任感の強い学年代表の焦燥を宥めた。

「二三日？ そんなにかかるのか？」

「まあ、個人差はあるけどね。変声つていうのは、最終的には声帯が二倍の長さになるために起こるんだけど、その初期段階では声帯が腫れるんだ。それで、腫れた部分の細胞が増殖して、少しずつ声帯が長くなっていく。三日も経てば、多分今みたいに空気が音しか出ない状態からは少し改善すると思う。でも、その間に、無理に声を出し続けると、改善中の声帯を痛めてしまうんだよ。なにしろ、腫れているんだから……」

「ざん……流石に、君はよく知つているなあ」

ウォルトは颯めていた眉を解いて、まだアルトの軽い響きを放つカミュの喉元を見つめ、保健体育の教員よりも詳しい

と見えるカミュの知識に敬服した。

ウォルトの目には、目の前の少年、彼の地元ではそれなりに有名なボーイアルトだったカミュは、既に彼の声が近い將來失われることへの恐れを克服しているように見える。というより、オーケストラでパーカッションを受け持ち、鍵盤楽器にも優れた音楽性を見せる少年は、既に声楽への興味を失いつつあるようにさえ思えた。

だが、そのカミュと親しい仲にある彼のルームメイト、ポール・フェリックス・リッジウェイは、依然としてその希有なボーイソプラノを誇り惜んでいるようだった。ポールは、ローカルレベルとはいえ少年合唱のCDでソロストも勤めたことがある。現在も、合唱団で現役のトップソプラノだ。

体の方には最早なんの不都合もないウォルトだったが、この悲惨な声をポールに聞かせるのは流石に少し躊躇われた。それで、ウォルトは少しカミュの耳元に口を寄せ、言つた。

「それじゃ、部屋に戻るとどうしても喋つてしまふし、もう暫く風邪つてことにおいて貰えないかな。今週いつばいくらい大人しくしてれば、多分また出るようになるだろう？ まあ、根本的解決にはならないんだが……どうも、ポールが気になるような気がしてね。そのせいで彼の変声が早まつたら申し訳ないし」

居心地悪そうに最後の言葉を付け加えたウォルトに、カミュは涼やかに笑つて見せた。

「いや、僕ら合唱に携わる人間はこのことはよく知つているか

ら、多分ボールも覚悟は出来ていると思うよ。…でも、可能ならその方がいいだろうね。君の為に」

「皆この声は風邪のせいだと思ってるみたいだから、大人しくしてればあと二、三日は大丈夫だと思つ。それじゃ、医務室に戻るよ。マダム・スミスに見つからないように」

寮名と同じ名の寮母の影を気にしつつ、ウォルトは元来た階段を下りて行つた。カミュはひとつ溜息をつき、再び自室に戻り始めた。

最近一人で行動する事が多くなつたボールは、今、何処で何をしているのだろうか、と思ひながら。

「ベートーヴェンとか…モーツァルトは？」

「うーん、なんか気乗りがしないな…もうちよつと派手なのがいい」

「ラヴェル？ ツイガーヌとか？」

「そりゃちよつと難しすぎるよ！ いや、カミュは弾けるかもだけだ」

「まあ、僕も、まだ無理だな」

「なんだじゃあ駄目じゃん。うーん、ホントはバルトークのルーマニア民族舞踊とかすてやりたいけど、これも難しいなあ…」
「それじゃ、無難なところでヴィイターのシャコンヌあたりだ

ね」

「ちえつ…なんかミーハーでイヤだけど、仕方ないか」

「こら、君達、実験中は実験に集中しなさい！」

人もまばらになつた化学実験室で、フリッツ教授はまだ半分ほどしか実験の進んでいないペアの頭をこつん、と叩いた。二年続けて受け持つ事になつた学年の問題ペアは相変わらず手が遅く、今年度に入つてもまだ実験居残り最多記録を更新し続けている。例外は、ペアのうちの一人、ミロ・フェアファックスが放課後に彼のサークルの上級生であるサガ・チェトウインドと約束をしている時だけだ。

実験がなかなか進まないのは、このミロが大変な凝り性で一々完璧を求めるからであり、相方が要領の良いカミュでなければ、実験終了までに更に倍の時間を費やすであろうことは想像に難くない。フリッツは、流石にいつも居残りに付き合わされるカミュを気の毒に思い、今年度はミロを別の人間と組ませようとしたのだが、皆居残りを嫌がつてミロと組もうとせず、結局またカミュが組むことになつたのだつた。

問題ペア、と言つたが、フリッツは実は彼らが大変気に入っている。きちんと真面目に取り組んで正確な結果を出してくるし、レポートも先輩のものを写して済ませるような真似は絶対にしない。彼らの所属するサークルは結構な練習量であるのに、一体いつ勉強をしているのかと感心させられる。しかも、二人共楽器に堪能で、かなりの腕だ。

音楽といえぱリコーダーを吹いて漸く及第点を貰つた経験

しかないフリッツとしては、そんな彼らが羨ましくもあるのだ。それなので、大人しく実験を再開した少年達を見て、フリッツはこほん、と咳払いをした。

「ところで、シャコンヌなら私にもわかるから、是非それにしなさい。うちに、えーと、誰だったかな、そう、シェリングのレコードがあるんだ。旨くシェリングみたいに弾けたら、スミスハウスに五点ずつおまけしてあげよう」

「先生…それは流石に無理ですよ！」

カミュが驚いて顔を上げ、ミロもぶんぶんと言を振った。

「そりゃ、あんな風に弾けたらいいけど……！」

「いかなあ、最初っから諦めるとは若者らしくない。いいかい、私が、そう思えばいいんだよ？」

音楽の成績は可しかとつた事がないから、誰も文句はつけんよ、と教授はウイंकを残して去り、ミロとカミュは呆気にとられて顔くしかなかった。

今年度最初の選択音楽の課題は、シャコンヌに決めるしかない。

「…じゃ、今度の休みに楽譜を買ってくるか……！」

ミロがガシガシと頭をかきながらぼやくと、カミュは少し唇の端を引上げて笑った。

「実は、もう持つてる。シャルリエ版でよければ、だけど」

「えっ？　なんで？」

「多分、そんなところに落ち着くだろうと思ってた。君とペアを組む事が決まったときから、いざれ必要になるだろうと思っ

て買っておいたんだよ。まあ、もしそうならなくても、サガ先輩あたりにお願いで一度はやつてみたいと思つていたし」

「なんだよ、それー！　決まつてたんなら最初に言えよ。つて言うより、あああ…ピアノつていいよなあ…オレもピアノ弾けるようにしとけば良かった…！」

「どうして？」

「だって、サガと組めるじゃないか！」

サガと組むにはそれなりの技量が必要なのだが、そんなところまでは頭が回っていないと見えるミロは、がつくりと肩を落とした。

「いいなあ…オレだつてサガとシャコンヌ弾きたい……！」

一年前、オーケストラに入部してきてからというものの、ミロの心はこのヴァイオリンの上手な先輩の上から動いたことがない。ミロにとつて、サガ・チェトウィンドは最大の尊敬を捧げる対象であり、宝物のように守りたい存在であり、また、密かに思いを寄せる相手でもあった。

その情熱は、この春、彼が初めて経験した失恋の後も些かも変わらない。

一方、カミュはと言えば、この春以来ミロのサガに対する純粹な傾倒に、幾許かの寂しさを感じるようになっていた。ミロがサガを好きなのは承知しているが、サガには十中八九既に面思いの相手がいるのだ。しかも、そのサガの相手とは、ほぼ間違いなくミロが心から尊敬するもう一人の先輩であり、どう鼻屑目に見てもミロに分があるとはカミュには思えない

のだった。

春以来、というのは、正確に日付まで分かっている。ミロと大喧嘩をしていた頃、明け方に奇妙な夢を観た日だ。

そして、その前日、カミュは同室のボールから、真剣な告白を受けたのだった……

「別にヴァイオリンとピアノじゃなくたって構わないじゃないか。ヴァイオリンのデュオだっていい曲はいくらもあるだろう？」

不毛な思考に陥りそうな気分を振り払うように、カミュは努めて明るく言った。「サガ先輩だって、喜んで乗ってくれると思うよ」と。

「いや、そうなんだけどさ……なんか、気後れするんだよね。同じ楽器だと。どうしたって、サガには叶わないからさ……」

「そうかい？ 僕は、君のヴァイオリンもかなりのものだと思うけどね。本気を出せば、だだけ」

「本気って……オレはいつだって本気で弾いてるぜ？」

「じゃあ訂正。君が、弾きたいものを弾いている時、と変更するよ」

カミュの脳裏には、先日礼拝堂で聴いたミロのバッハが鮮烈に焼き付いている。ミロが、愛犬の死を悼んで奏でたヴァイオリン——あの瞬間、ミロの音楽は確かにサガの技量を超えていた。

勿論、カミュだってサガの「本気」を聴いたことなどないのだが。

「そういうのは、絶対ナントカ欲目とか鼻屑目、って言うんだよ」

ミロの方は、カミュの贅辞をまともに受ける気もなく、ストツプウォッチとにらめつこしながら、まだ未練がましく呟いている。

「そうだよな……ヴァイオリンはオーケストラで弾けるんだから、選択音楽はピアノにしとけばよかつたんだ。そうすれば、歌の伴奏とかだつて出来たし」

「……僕だって、君と弾きたかつたんだけどな……」

「え？ 何？」

呟いた声は、実験の続きを始めたミロには届かなかつた。届かないくらい小さな声だつたことを、カミュは知っていた。

「……何でもないよ。早く済ませよう。」

ミロが首を傾げて見つめる中、カミュは新しい試験管を取り、ビーカーの中の綺麗なオレンジ色をした液体を移し始めた。

アイオリア・ジャスティン・エインスワースが隣部屋の住人の異変に気付いたのは、同じく隣部屋のウォルトが酷い風邪から復活してきた翌週のことだつた。この週、使用後のラグビーグラウンドの整備当番になつていたアイオリアは、他

の部員より一時間遅れて帰寮する日々が続いていた。ただでさえハードな練習の後で、口を聞くのも億劫なほど疲れ果ててはいたが、あまりにも意外な人影がグラウンドの向こうに去って行くのを見かけたので、つい気になって後をつけたのだ。

意外な人影、とは、當日頃カミュにまともなわりついているポールである。泥臭いグラウンドとは無縁の管の合唱団のスターが何故、毎日一人でこんな場所までやってくるのか。疲れた足を叱咤して辿り着いた相手は、その理由を語ろうとはしなかったが、アイオリアにこれまでのポールとは異なつた印象を植え付けた。

そんなわけで、アイオリアはその夜、カミュを誘つて早めに自室に引き上げた。第四学年に上がった今年、彼等はくじ引きの結果ミロと共に同室になり、ハウスマスターに言わせれば『まだ二年目の身で三人部屋の贅沢を享受』している。無論これはハウスマスターの茶目つ氣たつぶりの冗談であり、実際のところは、改装工事で潰された部屋の代わりに物置小屋だつた場所に押し込められているに過ぎない。

ミロはまだ談話室で昨年同室だつたハウ達と喋っている。マイケル・ガネットがまた小難しい本を小脇に抱えて、ミロとハウの話がおわるのをうすうすしながら待つていたから、おそろく当分戻つて来られないだろう。

アイオリアは部屋の扉を後ろ手に閉めると、カミュの向かいのミロのベッドに腰掛けて、お前も座れよ、とカミュに促した。

「いやさ、俺、こういうのつてどうしたらいいのかよく分からんから……同じ聖歌隊のお前なら上手く対処出来るだろう、と思つてな」

珍しく真剣なアイオリアの眼差しを、カミュは揺るがず受け止めて見つめ返した。

「……ポールのことか？」

「ああ、何か、気付いていたか？」

「いや、特に、問題になりそうなお話は……」

カミュは咬き、小さく首を横に振つた。

「最近、あいつとはあまり喋らないのか？」

「そんなことはないよ。部屋は別れたけれど、水曜と金曜の練習では一緒だし、それ以外でも努めて喋るようにしている。矢張り、少々情緒不安定なようだから……」

「うん……そうだろうな」

アイオリアは溜息をつき、がしがしと後頭部を掻いた。

「あいつさ、最近、なんだか知らないけど一人で夜のグラウンドに通つてるんだよ。昼間ならともかく、わざわざ夜にだけ？ まあ、門限までには帰つてるみたいだが、そろそろ風邪ひいてもおかしくない季節だし、ちよつと気になつてさ」

話しかけてみたが、あんまり構つて欲しくなさそうな感じだつたし、と咬く表情には、はつきりと困惑の色が滲んでいる。「ただ、俺が変声した時はどうだったか、つて別れ際に聞かれて……ウオルトもついに変わったし、やつぱり、あいつも気にしてるのかな、つて思つたんだ。うちは兄貴も早かつたから、

あんまり遅れたらバカにされるんで、どっちかつつーと嬉しかった、なんて話をしてき。そうしたら、あいつ、『さういう考え方もあるのか』って笑ってた。なんか、ここ数ヶ月で背も随分伸びてるし、急に大人になったよな、あいつ」

カミュは黙って、アイオリアの言葉を聞いていた。ポールが今誰よりも早く大人への階段を駆け上がりつつあることは、カミュが一番よく知っている。ポール自身は留まっていたかったようだが、彼の身体の急成長が、精神の成長をも余儀なくさせた。

皮肉なことに、その事がポールと他の寮生との間に開いていた距離を縮めている。アイオリアもその一人だろう。かつて、美声を誇る生意気な少年と見なされていたポールは、実は今密かにクラスメート達の気遣いを受けている……。

「グラウンドで何をしていたかは分からなかったか？」

「ああ、遠目にはただ突っ立ってるようにしか見えなかったよ。でも、唇が動いてた。何か独り言を喋ってるのか、歌の歌詞でも呟いてるのか、と思ったんだがそれ以上は分からなかった」

「唇が？ では声は？ ポールの声なら、唇の動きが見える距離なら聞こえたはずだ」

「それがさ。声はちつとも聞こえなくてな。それで、俺はむしろヤバイと思ったんだが」

カミュは組んでいた腕と解いて右手こぶしを口元に当てた。何かを考え込むときのカミュの癖で、同学年からは『じじく

さい』とからかわれているが、当人は気にも留めない。アイオリアも他の級友と同じ印象を持っていたが、このごろまた身長が伸びて顔立ちも大人っぽくなってきたカミュがやると、そのうちきつと憎たらしい程ハマる構図になるんだろうなと思つた。

たつぷり一分ほど、カミュはその姿勢で固まっていたが、やがて腕を下ろすと真つ直ぐ顔を上げてアイオリアを見た。

「……教えてくれて有り難う。これは僕の予想に過ぎないが……多分、彼はなるべく喉に負担をかけない歌唱法を模索しているのだと思う。変声間際は、ちよつとした風邪や喉の不調が変声のきつかけになるんだ。ピアノニッシモで声をコントロールして腹筋を鍛え、声帯に負担をかけない練習をしているのかも知れない。それにしても、この気候で外に長時間居るのは喉にもよくないから、僕が話してみるよ」

「成程、腹筋ねえ……それって、寝る前に筋トレ百回やるとかじゃダメなのか？」

「ああ、その腹筋とは使う筋肉が違うんだよ。僕らの筋肉は、息を支えるための筋肉だから。スポーツで鍛えられるのは、マラソンでもしてスタミナをつけたり肺活量を大きくする事くらいかな」

「さうなのか……歌も結構大変なのな」

アイオリアは不思議そうに、それでも懸案をカミュに預けたことにほつとして、『それじゃ、俺疲れたからもう寝るわ』と自分のベッドに潜り込んだ。日々の練習で疲れ切つて返つ

てくるアイオリアは完全に朝型で、夜は消灯前に寝てしまう事も多い。宿題は、その代わり朝四時に起きて片付けている。カミュは、早速寢息を立て始めたアイオリアの邪魔にならないよう自分の机にもしていたライトを消し、月明かりの落ちる窓辺に両肘をつけて外を眺めた。

ポールはちゃんと戻って来たのだろうか。

確かにここ数日、放課後に彼の姿を見かけなかった。日曜に二人だけの時間を持つようになって少し安定したのか、ポールは今学期に入って以前ほどカミュにまとわりつかなくなつた。食事もウォルト等同室のメンバーと取る事が多くなり、カミュはポールの交友関係が広がった事に安堵していたのだが、そのせいで異変に気付けなかった。

アイオリアには言わなかったが、カミュの中にはひとつの確信があつた。おそらく、ポールの変声は既に始まつているのだ。殆どの少年達はそれをある日突然訪れる変化だと思つているが、繊細な音のコントロールを可能にする歌手達は、その最後の日までいくつかの段階がある事を知っている。

それは高音部での僅かな違和感に始まり、それから徐々に高音が出にくくなり、ついにある日突然、全く出せなくなる。変声を迎えた合唱団の少年達が端から見ると意外に落ち着いて見えるのは、彼等がその最後の日々を既に体感してきたからだ……。

不意に、今も続けている週末の二人だけの練習が、かけがえない貴重なものと思えて、カミュは両腕を抱えるように組み身震した。

この数ヶ月、体躯のしつかりしてきたポールの声は一段と艶やかさと安定感を増している。誰にも訪れる、消える前の最後の輝きだ。その響きを、自分だけが独占していてよいものだろうか？

もともと、第三者に聞かれたくないと言つたのはカミュの方だつた。歌はもう止めるつもりだつたし、きっかけはポールの熱心な誘いを断り切れなかつた、というだけの事に過ぎない。だが、半年が過ぎ、この週末の練習から第三者を閉め出すのはむしろポールの方になつていた。たまに彼等の声に惹かれて学生が入つてくると、ポールは不機嫌に黙り込んで歌うのを止めてしまふのだ。

残る声の全てを捧げられても、カミュにはその想いに応えることは出来ない。それでも、一度歌い始めてしまえば境界は曖昧になり、カミュもまたポールの声に引き摺られる。その疑似恋愛のような瞬間に、ポールは残りの時間の全てを賭けている……。

断ち切らねばならないのは自分の方だつたと、カミュは漸く気付いた。

引き摺られるのは、自分が溺れたいからだ。本当は他の誰かと共有したい一体感を、ポールと共有することで宥めようとしている。

このままでは本当に声を失った時、ポールには何も残らない。自分が引き摺られるから、ポールはこの真剣な遊びを止めることが出来ないのだ。

何とか、ポールに最後の舞台を用意してやることは出来な
いだろうか、と思案するうち、カミュは窓辺に寄りかかった
まま眠りに誘われていった。消灯直前にミロが部屋に戻り、
驚いてカミュを揺り起こすまでに見た浅い夢の中で、カミュ
はポールが自分を責める声を聞いた。君が本当に好きなのは
一体誰なのか、と。

好きな人なんて、まだ居ない。

夢の中で呟いたつもりの言葉は実際に唇から零れ、側に居
たミロにも届いた。訝しげな表情のミロに『お休み』と一言残し、
カミュは毛布に包まって目を閉じた。

疑似恋愛に、酔ってはいけない。ポールも、自分も。

……好きな人なんて、まだ居ない。

二

クライスラーの『前奏曲とアレグロ』の荘嚴な音色が、音
楽棟練習室の窓から零れて来る。窓の外を通る人は、学生も
教員も、しばしその場で立ち止まり、息をひそめてその音色
に耳を傾け、溜息をついて窓を見上げる……。

月曜の夕べ、ここではすっかり馴染みになった風景であり、
誰もが、その音の主を知っていた。

シュローズベリ伯爵家の長男、チエトウィンド卿と呼ばれ
るサガと、今年パークハウスの寮長になった最上学年のエリ
オット・リード、今年の音楽クラスのヴァイオリン部門とピ
アノ部門の首席ベアだ。エリオットは昨年新入生だったカミュ
に首席の座を譲ったが、今年度は再び首位に返り咲いた。

以前から、音楽専攻の学生に引けをとらぬと噂されていたが、
最近、ヴァイオリンのサガの音色が格段に変化し、専門生
より音楽性があると密かに囁かれている。その理由を知る者は、
殆どいない。

ふと、ピアノが乱れ、音楽が止まった。サガはヴァイオリ
ンを下ろし、エリオットは小さな溜息をついた。

「すまない。……出が遅れた」

「いえ、私が少し走りすぎました。もう一度お願い出来ますか？」

「いや、少し休もう。君も腰掛けたらどうだ？」

エリオットは椅子をひき、傍らのパイプ椅子に腰掛けたサガに向き合った。

「少しお疲れのようですね……先輩」

「いや、そんなことはないよ。……君が、大変な勢いで上達しているんだよ、サガ。一年の間に、君のヴァイオリンは本当に自由になった……」

「それは褒められるべき事ではないでしょう。私一人で弾いて

るわけではないのだから、もう少しテンポにはめないよ……」

「それは、僕の技量が君に追いついていないと言いたいのかい？」

少しからかうようなエリオットの口調に、サガははつと息を飲んだ。

「いえ、決してそんなつもりでは……！ 気を悪くされたのならどうか許して下さい」

「冗談だよ、安心しなさい」

エリオットは声をたてて笑い、それから少し、真面目な表情でサガを見つめた。

「……僕はね、君のヴァイオリンになら、完璧に合わせてみせる。初めて君に出会った時に、そう思ったんだ。僕にとってはその難しいことじゃない……君のヴァイオリンなら、手に取るように、その軌跡が見える。誰にも、君の音楽を殺させたり

しない、と。……でも……」

エリオットはそこで押し黙った。言葉を探しているのか、口にしにくい台詞なのか。サガが判じかねているうちに、エリオットは心を決めたように、再び口を開いた。

「白状すれば、……最近では、君の音楽に同調するのが少し辛い。君の音楽の向かう先はこの僕ではない……君の音楽が自由になり、音色が艶を増す程、アイオロス・エインズワースに嫉妬しないと云つたら嘘になるよ。君を変えたのは、彼だ。……でも、そんな事は既に分かっていた事だ、もう一年も前にね」

サガの心は、まっすぐにアイオロスに向かっている。感情のコントロールについては厳しく教育されてきたサガが、普段そのことを表に出す機会は皆無と言つていい。教官の中に、彼等の秘密の恋愛に気付いた者はないだろう。

だが、そうして普段感情を抑えているが故に、サガのヴァイオリンは何よりもそのことを雄弁に物語る。一年前には、ヴァイオリンの音にすら強い自制が滲んでいたというのに。

「嫉妬はする。……だが、それも、弾き始めるまでの僅かな時間だ。一度奏でてしまえば、何もかも忘れて君の音楽に恋をする……僕は、この手がピアノを弾ける事に感謝しているんだ。……でも、」

エリオットは、またそこで言葉を止めた。平素穏やかな最上級生は、密かに両手を握りしめ、何かを懸命に堪えているかに見えた。

「先輩……」

「サガ、エインズワースと何かあった？」

これまでとは打って変わった厳しい声が、サガの耳を打った。サガは反射的に顔を上げ、その結果、エリオットの容赦ない眼差しに晒されることになった。

「何、とは……」

「まさか、僕が気付かないと思っていたのかい？ 正確には二週間前からだ。……君は、エインズワースとの事で、何か真剣に悩んでいる。表情に出さないうのは流石だが、ヴァイオリンを弾けばすぐに分かるよ。感情を制御出来ず、僕のサインを見過ごし、先走って飛び出してしまふ……以前の君には絶対なかつたことだ」

一瞬、サガは呼吸を忘れた。エリオットは、これ以上なく正確に、現在のサガの状態を判じてみせたからだ。

思わず自らの首筋に伸びそうになった右手を、サガは意思の力で留めた。……髪に隠れる場所だ。余計なことをしなれば、見える筈がない。

「フライベートは詮索すべきではない。だが、僕は最上級生として、君がもし公に出来ない問題を抱えているなら君の相談相手になり、解決策を模索する義務がある。他の誰にも相談出来ないだろう？ 君達のことは」

エリオットは、サガから視線を外さない。耐え切れなくなつて、ついにサガの方が視線を外した。

誰かに相談したい。ずっとそう思っていたが、かといって、

エリオットに相談出来ることもなかつたからだ。

事の発端は、今年の五月に遡る。

サガが十六歳の誕生日を迎えた週の週末を、サガはロンドンのアイオロスの家で過ごした。

当初、アイオロスの両親から招きを受けていたのだが、弁護士であるアイオロスの父親の仕事の関係で急遽二人ともヨークシャーへ発たねばならないことになった。サガは知らせを受けて招待を辞退しようとしたが、アイオロスがそれを止めた。

アイオリアは、クラブの練習試合で週末寮に残る。外泊届けも既に出してあるのだし、週末二人だけで過ごせるまともな好機だ、と。

人目を気にしなくてもよい環境という言葉には抗い難い魅力があつたので、サガは結局外泊届けはそのままにして、つまり二人だけで週末の夜を過ごしたのだった。

その夜に起こった事は、今でも上手く言葉にする事が出来ない。あれほどの開放感、サガの十六年の人生の中で全く未知のものだった。金曜の夜から二日間、狭いベッドの上で泣き、叫び、アイオロスの体に縋り、快楽に溺れた。はつきりとしたこの時を境に変わったことがある。サガの体が、本当の意味での性的快楽を知つた、ということだ。そして、恐らくアイオロスの方も。

最早まごとでなく一線を越えた関係は、再び始まった新学期での二人の自制心に深い亀裂をもたらした。アイオロスは人目がないと見るや所構わずキスを求めてくるようになったし、今学期から同室の二人部屋になったこともあって、二三日に一度はサガのベッドを訪れるようになった。だが、寮の薄い壁や鍵のかからない扉の内側は、人目を忍ぶ関係に適しているとは決して言えなかった。満足に声も出せない環境で不安を抱えながらでは集中出来ない、というサガの訴えに、アイオロスは一定の理解は見せたが、それでもその衝動は止まらなかった。口を塞がれて涙を零しながら必死に快楽に耐えているサガの様子に、むしろアイオロスはより深く溺れた。

難しいのは、アイオロスが受け身であるサガの体の都合について全く理解していないということだ。サガ自身、同性であるが故の不都合はなるべく見せないようにして来たから、責任の一端はサガにもある。初めて結ばれた去年の十二月以来、二人は抱き合える機会にそう恵まれた訳ではない——いわばまだ初心者であり、サガ自身が五月のような快楽を感じる為には、十分にリラックスする必要がある。アイオロスが考えるほど簡単ではないのだ……内なる快感を呼び覚ますのも。

結果、何時見つかるか知れない不安の中、リラックスできないまま受け入れざるを得ない体は軋み、サガの方の快楽は専ら彼の性器に加えられる刺激に頼る事になる。アイオロスはそれの何処が問題なのか理解出来ないようだが、サガとし

ては、アイオロスにマスタベーションを手伝ってもらいたい訳ではなく、矢張り繋がっている部分で快感を感じたいのだ。セックスとは快感はあっても何処か苦しいもの、と思っていたサガにとつて、五月の体験はそれを完全に打ち砕くものであり、本当の快楽を知ってしまった今となつては、中途半端な快楽はただ体の熱を増し、平素に振る舞わねばならぬ翌日の苦労を増すだけであった。

サガとしては、これらの事を何とか機会を見つけて真面目に話したいと思っているが、そのような機会があまり二人だけの時ということであり、そんな機会があればアイオロスは容赦なくキスを求めてくる。二週間前に漸く一通り話したが、どれだけアイオロスに伝わったかは疑問だ。同時に、本当に困っているのだと打ち明けても真面目に取り合ってもらえない歯痒さに、サガも少々焦りを感じていた。

焦りや苛立ちには、最も素直に音楽に現れる。エリオットほどの奏者なら、それに気付いてもおかしくはない。

だからこそ、なるべく感情を出さぬよう注意していたつもりなのだが、二週間が過ぎて遂にその自制に綻びが出てしまった。

曲もまずかった。前奏曲とアレグロ。何事もなくとも、この曲はコントロールが難しい……自制しすぎれば凡庸になり、やりすぎれば情緒過多になる。

「……すみません、先輩。お気遣い有り難うございます。でも……もう少し、時間を頂けますか。きつと……解決出来ると思います」

漸く口を開き、丁重に頭を下げたサガに、エリオットは小さな溜息をついた。しかしその姿は、その答えを予想していたかのようにもあつた。

「君がそう言うなら、仕方がない……。だが、一つだけ、確認させて欲しい。……暴力や、強要ではないんだね？」

エリオットの懸念は、最上学年でなおかつ寮長の肩書きを持つ人間としては当然のことだ。パブリックスクールの閉鎖的な空間では、同年代の女子学生に向かうべき感情が同性に向いてしまうことはそう珍しいことではない。問題は、それが時折、強者から弱者への暴力や関係の強要に繋がつてしまうことだ。なまじ恋愛感情があるだけに、被害者は誰にも言えず、取り返しのつかない傷を受けるまで我慢してしまふ。

「いえ、それは違います。暴力は一度もありませんし、強要されている訳でもありません。……ただ、少し話し合いが必要だとは思いますが……」

「そうだな……君達は来年には最上級生になる大人なのだし、僕がそれほど心配することではないのかも知れない。だが、もしそのような兆候が見えたら、一人で悩まずに必ず誰かに相談すると誓つて欲しい。僕に相談してくれば嬉しいが、そうでなくとも構わないから……」

サガの両手をとつて真摯に訴えるエリオットに、サガは再

び礼を述べて深々と頭を下げた。言葉の端々に、昨年の秋から微塵も揺らぐことのないエリオットの愛情を感じる。以前はそのような好意に疎かつたサガだが、今ならわかる——そしてその感情を抑えつつ、このように紳士的に振る舞う事が、どれほど大変なことであるかも。

二人は再び楽器に向かい、クライスラーの名曲を奏で始めた。今度はびつたりと息の合つた演奏は、再び窓の外に聴衆を集め、それは日が沈むまで続いたのだつた。

「おい、ロス！ やつと来たぞ、アイアン・メイデンのチケツト！」

スミスハウスの緑の廊下を食堂へと急ぐアイオロスの頭上に、階段の上から大層機嫌のよい声が降り掛かつた。

見上げると、黒く短い髪をつんつんと立たせた人影が、何やら指に挟んでひらひらと振つている。

アイオロスは、「よう」と軽く手を挙げ、同学年でも少々異色な友人を待ち受けた。

下りて来たのはデジー・ギネス、母親はイタリア人だが心は百二十パーセントイギリス人の心霊オタクで、心霊科学研究倶楽部の部長を勤めている。